

S12

## 実環境に動機づけられた手話空間の共同構築

佐野文哉  
(京都大学 [日本])

### 要旨

ろう者コミュニティで使用される手話を対象とした言語学的研究をとおして、ろう者は「手話空間」(Klima and Bellugi 1979など)と呼ばれる話者の身体の前方に広がる空間を活用することでさまざまな言語的情報を表現していることが明らかとなった。手話空間を言語的に使用している例としては、「参照場」(Lillo-Martin & Klima 1990 など)への代名詞的な指差しが挙げられる。参照場とは、手話空間内に構築された、参照物と関連付けられた抽象的・統語的な場である。また、参照場は動詞の一致にも用いられる。しかし、これまでの研究は、手話空間の構築と使用を個人の認知的・統語的観点から分析するにとどまり、多人数が参与する手話相互行為において、ろう者がいかに手話空間を共同で構築し使用しているのかについては解明されてこなかった。本発表の結論を先取りすると、多人数が参与する手話相互行為においては、手話話者をとりまく実環境が、手話空間を共同で構築し使用するうえで重要な役割を果たしている。しかし、ろう者コミュニティの手話を対象とした従来の研究の多くは、手話相互行為や手話表現それ自体に焦点をあてており、手話相互行為と手話話者をとりまく実環境との相関関係についてはわかっていないことが多い。

本発表では、多人数が参与するフィジー手話相互行為において、フィジーのろう者が、さまざまな社会文化的意味を潜在させた実環境のなかでいかに手話空間を共同構築・共同使用しているのかについて論じる。発表者は、2013年からフィジーのろう者コミュニティや手話を対象とした現地調査を行ってきた。発表者による人類学的な現地調査の結果、フィジーのろう者は、お互いの出身村や彼らをとりにくく実環境などに関するさまざまな背景知識を共有していることがわかった。また社会文化的状況や日々の身体経験が、フィジーのろう者をとりまく実環境にさまざまな意味を付与していることも明らかとなった。本発表では、そうした言語外情報と、多人数が参与するフィジー手話相互行為における空間使用とを照らし合わせて分析することで、以下の二点を明らかにする。(1) フィジーのろう者は、多人数が参与するフィジー手話相互行為において、参照場を共同構築することで、個々の手話空間には還元できない「手話相互行為空間」を共同構築していること、(2) 手話話者をとりまく実環境が、手話相互行為空間の共同構築を助け動機づけていること。

### 参考文献

Klima, E. & U. Bellugi. 1979. *The Signs of Language*. Cambridge: Harvard University Press.

Lillo-Martin, D. & E. Klima. 1990. Pointing Out Differences: ASL Pronouns in Syntactic Theory. In S. Fischer and P. Siple (eds.), *Theoretical Issues in Sign Language Research*. Vol. 1, pp. 191-210, Chicago: The University of Chicago Press.